

- (1) 書籍紹介：「介護用リフト」初めの一步 ～ 「吊りバカ」の独り言 ～
 (2) 目次：全、第八章
 (3) 書評：高齢者生活福祉研究所 所長 理学療法士 加島 守

(1) 書籍紹介



「介護用リフト」初めの一步 ～ 「吊りバカ」の独り言 ～
 磯部弘太 (いそべ ひろた) 著
 新生出版 定価 1,000 円 (税別)

2000年に介護保険制度がスタートしてからはや、5年が過ぎようとしている。現在、福祉用具の貸与対象は12品目あるが、その中で、介護用のリフトの導入は、100件中、1件。わずか1%というのが現場での普及の実態。

ヘルパーの転退職の理由の常連のトップに「腰痛」が挙がってくる。欧米では、人が人を持ち上げる基準があるが、日本では「物」に対する基準はあっても、「人」に対しては存在しない。少子高齢化時代、介護する側は若い世代であり自身の健康は自己責任で管理する時代が来ているようだ。

リフトは、介護される側においても、入浴が毎日できるようになった等、生活の質(QOL)を向上させる可能性を秘めた用具である。しかしながら、今後の課題として、各利用者の状況に合わせた用具の選定とその取り扱い方法、そしてどのような福祉用具と関連させて活用していくのか、正しい理解が更に求められるようになるだろう。

リフトの導入は決して難しくない。これまで、リフト機器の取り付け現場に長く関わってきた著者だからこそ見えてくるユニークな視点が、この本の随所に見られた。介護をされているご家族のみならず、ヘルパーや、ケアマネージャーの方にも再度、チェックしていただきたい確認ポイントが満載されているのも嬉しい。

この本は、リフトに関するイメージと誤解を解きほぐしてくれる一冊といえる。

株式会社ディマーク 介護研究班



*** 著者略歴 ***

磯部 弘太 (いそべ ひろた)

1952年 東京都生まれ。

日本大学短期大学部建築科を卒業、都内ゼネコン勤務を経て、株式会社暖工務店を設立。

現在、某リフトメーカーのテクニカルアドバイザーを兼任。

大田 NEXPO ふれあいネット会員。

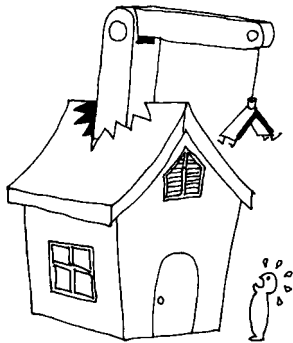
(2) 目 次

はじめに	第六章 とまあ
第一章 そもそも	出合ってよかった
「介護の世界」にはまった工務店のおやじ	第七章 まずは
第二章 てなわけで	とりあえず何をしたら
すばらしき? 「合宿体験」	その1 お役所に行こう
第三章 いよいよ	その2 要介護度の認定
“楽”をするのはいけないこと?!	その3 担当ケアマネージャーの決定
イメージと誤解	その4 介護内容の相談と決定
第四章 それならば	その5 生活の始まりと見直し
リフトの種類	第八章 いやいや
第五章 さらに	あとがき
吊り具・スリングシート	
「二本ベルト型」スリングシート	全128ページ

代表的な、“3つの誤解” (本文「イメージと誤解」より引用)

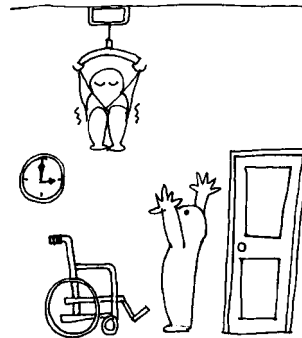
誤解1

「大げさで、お金がかかりそう?」



誤解2

「怖いのではないか?」
必要以上に高くあげない。



誤解3

「操作が難しいのではないか?」



誤解 その一、レンタル制度の活用で、月々二千元から五千元で借りれます。

誤解 その二、一般的には、介護する人の目線より介護される人の目線が上になるとあまり気持ち良くはないようです。些細なことが、安心と不安の分かれ目になるのです。

誤解 その三、介護リフトの場合、「上下の動きは電動で」、「横の動きは人力で」というのが一般的です。リモコンに付いているボタンは、「上がる」「下がる」の二つがあれば十分です。

(3) 書 評

高齢者生活福祉研究所

所長 理学療法士

加島 守

「介護用リフト」と聞くと、なんか大掛かりなもの、というイメージをもたれる方が多くいらっしゃるかと思います。しかし、「『介護用リフト』初めの一步」のページを開けていただければ、そのようなイメージがあつという間に取り除かれます。

目次をあけてみれば、硬いイメージが消え去ります。第一章そもそも、第二章でなわけ、第三章いよいよ、と続きます。この時点で、介護用リフトとは、介護用リフトの構造と機能について、などという本ではないことがわかります。

著者の磯部氏は、こころから「人が人を持ち上げるのはやめましょう。」「たかが人を持ち上げるくらいのことだからリフトを使って、安全に、快適に、移乗しましょう。」ということを考えていらっしゃる方です。それは、本全体の中で、話し口調に現れてきます。

まず第一章の中で、「世の中には“普通”とか“標準”とか言う言葉があります。が、“十人十色”とか“個性”なんぞという言葉もあるわけですし」と書かれています。介護の世界や、福祉用具の世界で、まず必要とされていることは、利用者本人にとって状況の違いを把握し、ご本人に合わせるということ、言葉巧みに表現されています。第三章では、「“楽”をするのはいけないこと?!」と提言しています。介護の世界での常識をくつがえすこと、それを意図も簡単に的確に表現しています。それだけではなく、きちんとリフトの種類やスリングシートにも書かれ、一般の方ばかりでなく、リフトの経験の少ない専門職、特に理学療法士や作業療法士に読んでいただきたい本です。

磯部氏は、リフトを通して様々な方々との出会いの中で、その経験を大事にされていることがわかります。その経験から生まれたこの本こそリフト普及の第一歩となる本でしょう。

まずは、一読していただきたいと思います。



*** 略 歴 ***

加島 守(かしま まもる)

昭和55年医療ソーシャルワーカーとして勤務後、理学療法士資格取得。越谷市立病院、武蔵野市立高齢者総合センター補助器具センター勤務を経て、平成16年10月高齢者生活福祉研究所設立。現、所長。

共著書として、『ケアマネジメントのための福祉用具アセスメント・マニュアル』(中央法規出版)、『生活に合わせたバリアフリー住宅 Q&A』(ミネルバ書房)などがある。